



ペリフェリ ⑥



北の埋火

日本赤十字社 常任理事 渡邊 芳樹

私の郷里は北海道内陸の岩見沢市。一説によれば「イワミは（鳥の）カケス、サワは多い」というアイヌ語、いわば「カケスの里」が語源とも言われる。岩見沢神社境内の石碑によれば明治17年頃から本格的土族入植が山口県等を中心に行われた。かつて松野哲市長は石碑の文言は大事だと語った。

明治維新による動乱を経て北海道には本州（内地）各地から様々な人々が移住した。普通は自らのルーツを明らかにしないが、東北北陸出身者が多かった。東京から北海道に渡った祖父も宮城県出身。自治体のトップとして郷里に責任と誇りを持って政府に陳情をする立場となれば明治以来の中央権力の源流との縁を意識するのであろう。

90年代後半のある日、北海道庁に出身経験がある羽毛田信吾、厚生省保険局長（山口県出身）、後に事務次官、宮内庁長官を北海道オホーツク海沿岸の自治体の首長たちが陳情に訪れ温かく迎えられた。その際首長たち



は「好きで来た訳ではない北辺の地で頑張っている。国は特段の配慮を願いたい。」と述べた。いかに陳情とはいえ日頃耳にしない北海道民の心の内を吐き出した言葉であった。

今では自然、住居、食べ物、観光資源に恵まれた北海道だが、地域を支える地元大企業がない。かつて栄えた炭鉱業も中央の旧財閥系大企業だった。明治維新から百数十年経っても厳しい冬の北海道に追いやられたという意識が埋火のように打ちをかける。

仕事柄様々な政治家や自治体

と接してきた。北海道の関係者は例えば中四国・九州の政治家や自治体と較べ何か異なる。個々人の資質や個性とも違う。中四国・九州関係者には明治以来地元から人材を東京に出して中央の政治や行政を「自分事」として心をすり合わせてきた「自信」が感じられる。

一方、北海道の関係者には「無自覚な素直さ」や「あきらめ意識」が目立つ。逆に時折「威圧的」にもなる。政治は今も旧社会党・民主系政党的力が残る。東京の生まれ育ちだが道内に牧場を有する鳩山由紀夫氏以外に総理大臣を出したことがない。中央の政治や行政を自ら使いこなす感覚が乏しい。結果、地元の人材や事業を育てるよりも既に中央で権威のある者との縁に頼りがちとなる。

消滅可能性自治体も実際は簡単に消滅する訳ではない。地元の中堅若手が「自律と革新」の精神で北の埋火の意識を転換し国内外につながる新しい道を切り開いて欲しいものだ。